様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：３４４１６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４５２０６２０

研究課題名（和文）高等学校外国語科における活用型学習を通した思考力，判断力，表現力の指導と評価

研究課題名（英文）Teaching and assessing the English language proficiency of high school students in task-based teaching classroom

研究代表者
今井　裕之（Imai, Hiroyuki）

関西大学・外国語学部・教授

研究者番号：８０２４７７５９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、高等学校に限らず、小中学校も含めて、授業観察、実践者との授業づくり、授業研究・研修を行い、その記録と分析を行った。その結果、英語学習者が高等学校に至る過程において、活用型の学習形態が減少していること、教科書や評価等の学習環境の問題が明らかになった。小中学校の学習形態は、協働的な学習、タスク中心の授業が比較的容易な環境にあるが、高等学校では学習者たちが、英語の知識や技能を有しているにも関わらず、その活用が乏しいのが実態であったが、即興性、情動、感情を交えた言語活動の開発が、これまでの指導法を少なくとも補完する手段として有効であることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）： This research project conducted a number of classroom observation/recording, lesson development with teachers, lesson studies with them, and (discourse) analyses of the records of those research activities. The overall result showed that the Japanese high school learners of English had less opportunities of language using activities in classroom in comparison to elementary and junior high school learners. In elementary and junior high schools, collaborative learning, task-based learning and other group-based learning activities were adopted by teachers more often and efficiently, in spite of the fact that senior high school students are more skilled and have more knowledge of English. The data (lesson analyses, discussion with teachers) revealed that high school curriculum had the problems in quantity and quality (genre) of English text they were exposed, and also in lack of appropriate assessment methods and opportunities.

研究分野：英語授業研究

キーワード：授業研究　言語活動　スピーキング評価　即興性　情動　感情

１．研究開始当初の背景

本研究開始当時（平成 24 年）は，学習指導要領の改訂により新設された外国語科目「コミュニケーション英語」および「英語表現」において，思考力，判断力，表現力を育成するための指導内容および評価方法の開発が必要とされていた。Super English Language High School の研究開発を行った高等学校や、ディベート大会等を継続実施している学校及び教員の間では、活用型の授業実践は、浸透していたが、多くの学校では、未だコミュニケーション英語はリーディング中心、英語表現に至っては、英文法の指導が行われている実態があった。

２．研究の目的

高等学校教員（小中教員も必要に応じて含む）と大学教員による共同研究により、思考力，判断力，表現力の育成を図る活用型学習を多くの高等学校で実現可能な環境を整え、促進するために、特にタスクベースドの言語活動や、協働学習を取り入れた互恵的言語活動に焦点をあて，その開発と評価を目的とした。

３．研究の方法

高等学校での授業実践記録を通して活用型言語活動の指導方法、評価方法を開発し，実践後、教師らとの省察を行い、指導評価の実践記録と省察記録の蓄積、その分析から今後の課題を明らかにする研究方法を採った。

初年度は、実態調査を中心とし、高等学校の授業観察、教師への聞き取りを行ったが、文科省や都道府県の研究開発指定を受けている高等学校であっても、新しい科目（コミュニケーション英語１、英語表現１）への移行に取り組む時期でもあったため、タスクや協働学習などの言語活動の実施、開発に取り組む余裕のある学校も少なく、研究の対象を、小学校、中学校にも広げて、「活用型」授業への取り組みに積極的な学校や教員をさらに広く探すことになった。

２５年度以降は、言語活動を中心とした授業展開の必要性に前向きな学校も増え、県レベル、各学校での CAN-DO リストの作成に直接関わる機会を積極的に求め、英語授業に対する教員の考え方を聞き取り、言語活動中心の授業における学びと評価についての研修の機会を持つことが増え、研究当初念頭においていた英語授業の実践記録を取ることができ始めた。

26 年度で終了予定であった本研究は、当初のつまづき（新カリキュラム導入時に、授業内容改善を同時進行させる困難さ）もあり、26 年度に予定していた国際学会での発表は、翌年に見送り、26 年度は国内の学会での研究発表にとどめた。「活用型」の理解と浸透の鍵として「即興的学習 improvisation」を新たに取り入れた授業開発とパフォーマンス評価について小中高教員と開発を進め、ビデオ記録分析をするとともに、「パフォーマンス」の概念を社会文化理論に基づき再検討を行うことによって、「tool-and-result」方法でもあり結果でもある学びの形（playful learning）を外国語の学習に応用することを継続した。

27 年度は、「活用型」学習を形成するために、即興的な言語活動が果たす役割について、理論的なまとめと、これまで蓄積した授業実践事例分析とを重ねて、高等学校に至るまでの英語教育において、言語運用能力（コミュニケーション能力）を最終到達目標とし、それを達成するためには、知識の定着と運用練習による自動化を経て、言語運用能力を養おうとする、学校英語教員のおそらく主流を占める指導観を変えていくことを提案する研究発表（第 41 回全国英語教育学会シンポジウム）を行った。

研究期間の最後になったが、国際学会での招待講演で「活用型」学習の、新しい（少なくとも補完的な）アプローチとして、即興的で、学習者の感情、情動を契機とする活動から言語を、実感を持って学ぶ方法の提案を行い、小学校からそれを重ねる必要性を実例と共に示した。

４．研究成果

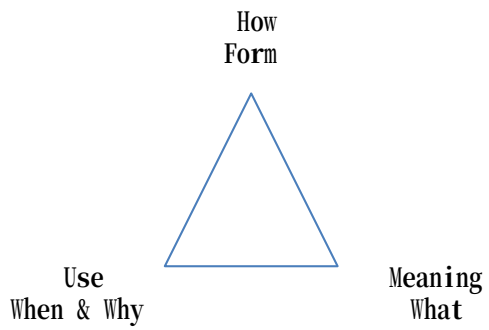
本研究は、大学教員と小中高の学校教員との協働実践研究、一般にはアクション・リサーチと呼ばれる形態をとることになった。別の見方をすると、研究の方法でも触れたように、研究を進める方法(tool)を模索すること自体が、研究の成果（result）にもなる研究であり（tool-and-result)、研究方法のセクションで、すでに相当分の研究成果について述べている。このセクションでは、特に成果と呼べるものについて、補足したい。

高等学校の授業観察、授業開発を試みた結果、当該外国語科目の目標と同様に、各学校のカリキュラム、学習者の英語技能の多様さ、教師の信条、高等学校教科書の潜在的問題点（分量の多さ、客観的記述分の多さ）などがあり、活用型学習の開発促進は、即興的なパフォーマンス学習を導入するまで、極めて限定的であった。英語技能がさほど高くない高校生（false beginners）であっても、即興的なパフォーマンス学習活動においては、英語知識以外を活用しての学習参加が可能であり、言語使用の実感、文字通りの意味だけでなく、自分の感情も伝えることができた（パフォームできた）という自信が、継続的で身の丈より少し背伸びした試み(a head taller performance)を可能にし、言語活動が大変豊かなものになった。

研究の後半では、「知識の活用の結果としての活用型学習」という捉え方だけではなく「言語活動を通して、自分の表現の特徴やクセに気づき、新たな知識・技能の更新」を可能にする「活用することで学習する」アプローチを、授業実践の中で開発できたことは、

本研究の研究成果と思われる。以下に実例を挙げて説明する。

高校や中学校の教員が、行っている授業実践の一つに「インテイクリーディング」と呼ばれるものがある（ペア活動で、一人が文章を１文読み、パートナーがそれを聞いて、テキストを見ずにリピートする活動）。この活動は、聞いた英語をリピートするパートナーにとって、記憶認知負荷を適度に掛けながら、言語形式と意味の接続を強化する活動でもあり、読み手にとっても、より正確に伝わりやすく読む教師的役割を担う協働学習でもある。この活動を単なる記憶保持トレーニングにしないために、英文テキストに工夫を凝らして（学習者が自作する、１人称語りの物語文を使うなど）より話者の情動を感じやすくすることにより、パートナーがリピート時に「ジェスチャー」を使う頻度が高くなった。また、「正確なリピート」よりもむしろ「自分の言葉で意味を伝える」ことを目標とする学習者が増える傾向が見られた。活動後に、学習者どうしで振り返りの時間を設け、「エラー訂正」ではなく「自分らしい英語の特徴を見つける」時間を取ることで、言語知識を深めることもできた。これらは、即興的な活動ではないが、換言すれば、即興的でない言語活動でも、言語形式(form)言語の意味(meaning)だけではなく、使用状況下での意図や感情(use)を意識することができたと言える。Form Meaning Use のうち、Form と Meaning は教室環境における教師の明示的指導による指導が可能であるが、Use は、常に変化する状況下で各個人が抱く解釈を含むものであるため、俗に暗示的知識(implicit knowledge)と呼ばれ、教師が指導できない領域である。それを教室で実施できる比較的単純でシステマティックな言語活動を通して実感出来ることが見出せたことを成果として強調したい。



一方、並行して行った小中学校における活用型（協働、タスク型）の言語活動の開発や評価については、当初より一定の成果が見られ、国際学会等での研究成果の発表も、むしろ小中の実践記録分析が中心になった。

小学校の授業では、教師が児童の時に不規則な発話を活かしながら授業進行することも多く、授業自体が半ば即興的であるとも言える。また、児童も言語学習を単語と文法といった単純化した発想はしておらず、むしろ常に、先生の発話の音声、意図に注意を払う傾向にある。例えば “Can you play soccer?”と尋ねられて「やりたい、やろう！」と応じる児童や、”What time do you go to school?”と尋ねられて「先生、それは家を出る時間ですか、学校に着く時間ですか」と尋ね返した児童らの姿を観察してきた。

そのような学習者と教師の即興劇の手法（improvisation）を用いた、小学校での桃太郎劇の授業実践について、本研究初年度の2012 年（平成 24 年）に、学会 Performing the world 2012,ニューヨーク（アメリカ合衆国）で発表したが、「高等学校における活用型学習」の研究が、結果として、即興性や、認知だけでなく情動も含めた言語使用の実践に至るとは考えていなかった。中高の教員と協働するうちに、小学校とは同じではなくとも、言語活動（即興的なものもそうでないものも含め）を通して、言語使用者の情動、感情の実感が、言語形式の認知、知識化にも役立つことが明らかになった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計５件）

① IMAI, Hiroyuki, The Japanese government’s blueprint for strengthening English language education from primary school: teaching, testing and teacher training.（招待講演）2016 KAPEE International Conference, 2016 年 1 月 16 日，大邱広域市（大韓民国）

②今井　裕之、日本の英語教育の将来：「話すこと」の評価方法（招待シンポジウム）第 41 回全国英語教育学会熊本研究大会、2015 年 8 月 23 日、熊本学園大学（熊本県）

③ 藤原　由香里、今井　裕之、他、偶発的、即興的に生起する学びの探求：明日の教育をパフォームするための実験的発表、日本教育心理学会、2014 年 11 月 9 日、神戸国際会議場（兵庫県）

④ 今井　裕之　中高生のスピーキング・パフォーマンス評価：パフォーマンスを学びに（招待公演）、英語教育公開シンポジウム：これからの英語教育−ポジティヴに可能性を探る−、2014 年 9 月 20 日　神田外語大学（千葉県）

⑤ IMAI, Hiroyuki, A Sociocultural approach to task-based language learning in primary and secondary EFL classrooms in Japan. TESOL 2014 International

Convention. 2014 年 3 月 27 日　ポートランド（アメリカ合衆国）

〔図書〕（計２件）
① 今井　裕之、「外国語教育においてコミュニケーション教育は可能か」山岡俊比古先生追悼論文集編集委員会（編）、開隆堂、『第二言語習得研究と英語教育の実践研究』2014 年 330 に収録

② 今井　裕之　「スピーキング力の構成要素と評価」全国英語教育学会 40 周年記念特別誌編集委員会（編）開隆堂、『全国英語教育学会 40 周年記念特別誌　英語教育の今−理論と実践の統合−』2014 年 436 に収録

６．研究組織
(1)研究代表者
今井　裕之（IMAI, Hiroyuki）
関西大学・外国語学部・教授
研究者番号：80247759

(2)研究分担者
吉田　達弘（YOSHIDA, Tatsuhiro）
兵庫教育大学・学校教育研究科・教授
研究者番号： 10240293

柳瀬　陽介（YANASE, Yosuke）
広島大学・教育学研究科・教授
研究者番号：70239820

松井かおり
朝日大学・経営学部・准教授
研究者番号：70421237